

# JSMR Newsletter

多文化関係学会ニュースレター



第48号

2026年2月

<b>目 次</b>	
<b>■ 第24回年次大会特集</b>	<b>2</b>
大会総括...2      基調講演...4	
シンポジウム...6      交流企画...8	
ポストカンファレンス...9      第25年次大会のご案内...10	
<b>■ 2025年度理事会議事録・総会議事録抄録</b>	<b>11</b>
理事会...11      総会...16	
<b>■ 地区研究会報告</b>	<b>17</b>
北海道・東北...17	
<b>■ 地区研究会のご案内</b>	<b>19</b>
関東...19      関西・中部...20	
<b>■ お知らせ</b>	<b>21</b>
Web管理・広報委員会より...21      学会誌編集委員会より...21	
学術委員会より...21      将来構想委員会より...22	
学術連絡委員会より...23      若手会員リクルート委員会より...23	
事務局より...24      新入会員紹介...25      NL委員会より...25	
<b>■ 編集後記</b>	<b>26</b>
<b>CONTENTS</b>	
<b>■ Report on the 24<sup>th</sup> Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations</b>	<b>2</b>
Conference Overview ...2      Keynote Speech...4	
Symposium...6      Networking Project...8	
Post-conference...9      Announcement of the 25 <sup>th</sup> Annual Conference...10	
<b>■ Minutes of 2025 Board Meeting &amp; General Assembly</b>	<b>11</b>
Board Meeting...11      General Assembly...16	
<b>■ Reports of Regional Study Meetings</b>	<b>17</b>
Hokkaido・Tohoku...17	
<b>■ Announcements from Regional Study Meetings</b>	<b>19</b>
Kanto...19      Kansai・Chubu...20	
<b>■ Other Announcements</b>	<b>21</b>
Web and PR Committee...21      Journal Editorial Committee...21	
Academic Affairs...21      Future Vision Committee...22	
Academic Liaison Committee...23      Youth Member Recruiting Committee...23	
Secretariat...24      New Members...25      Newsletter Committee...25	
<b>■ Editor's Note</b>	<b>26</b>

## 多文化関係学会 第24回年次大会

大会テーマ：ポストヒューマン時代の多文化関係  
～「分断」「多様性」「社会的包摶」を問い合わせ直す～

開催日：2025年10月4日（土）※1日開催  
会場：東京未来大学（対面開催）

### 第24回年次大会 大会準備委員会

委員長	石黒 武人	(立教大学)
委員	田中 真奈美	(東京未来大学)
委員	水松 巳奈	(東洋大学)
委員	姚 瑶	(芸術文化観光専門職大学)

### 大会総括

変わりゆく時代の地平を捉え、その地平に基づく「縁側」知的交流を目指して

第24回年次大会運営委員長 石黒武人(立教大学)

多文化関係学会第24回年次大会は、2025年10月4日（土）、東京未来大学を会場として開催され、全国各地から多くの会員・参加者を迎える、盛会のうちに終了しました。本学会は2002年の設立以来、学際的な視点から多文化社会における関係性、コミュニケーション、社会的課題について検討を重ねてきましたが、本大会はその知的蓄積を踏まえつつ、新たな社会的・理論的地平を探る試みとして位置づけられます。

本大会のテーマは「ポストヒューマン時代の多文化関係——『分断』『多様性』『社会的包摶』を問い合わせ直す——」としました。AI、ロボット、SNSなどのデジタル技術の進展は、人間同士の関係性のみならず、生成AIやロボット、我々を取り囲む環境といった人間外存在と人間の関係の在り方にも大きな影響を与えています。こうした状況を踏まえ、本大会では、ポストヒューマンという視座から多文化関係を再考すること

を目的としました。

基調講演では、上柿崇英先生に「ポストヒューマン時代が照射する共生・共同の根本問題」というテーマでお話いただきました。ポストヒューマン論の射程を整理しつつ、「自己完結社会」という概念を手がかりに、高度に発達した社会システムやAI・ロボットへの依存が、人間同士の直接的な関わりを希薄化させる一方で、「共生」や「共同」をいかに困難なものにしているかが論じられました。また、ポストヒューマン化が自己決定や「存在論的自由」を拡張する可能性を持ちながらも、分断や孤立を同時に深めるという逆説が示され、多文化関係研究にとって極めて示唆的な論点が提示されました。大会後のアンケートにおいても、「新しいテーマでありながらも多文化コミュニケーションと深く関わる内容で、大変刺激になった」など、高い評価が多数寄せられました。

大会の最後に配置された「縁側」知シンポジウム「ポストヒューマン時代のコミュニケーション学—関係性と主体を問い合わせ—」では、谷島貫太先生、小坂貴志先生、森田系太郎先生が登壇し、人間と書物、AI、自然といった人間外存在との関係性を視野に入れ、コミュニケーションの在り方について、それぞれの専門分野から議論が行われました。ポストヒューマンに関する三つの視点を通じて、関係性や社会課題を多角的に捉える試みとなり、参加者アンケートでも「多角的に考える機会となった」といった評価が示されました。本シンポジウムは、日本コミュニケーション学会との共催による分野横断的な企画として、「縁側」知の実践を具体化する場となり、年次大会における他学会との初の共催企画として意義ある機会となりました。

また、大会では、研究発表16件、ポスター発表2件が実施され、研究発表には朝から多くの参加者が集まり、ポスター発表では採択された2件のポスターに加え、院生・学部生の特別枠での発表もなされ、発表者と来場者の間で活発なやりとりが行われていました。それに加え、本大会では新たな試みとして「相互交流『縁側』タイム」を導入いたしました。専門分野や世代を超えて、縁側に腰掛けるように気軽に対話をを行う場として設計され、穏やかな雰囲気の中で活発な交流が行われました。この場を借り、この企画を運営された「縁側」知企画チームの先生方に感謝の意を表します。また、ナカニシヤ出版および明石書店の出展により設けられた書籍コーナーでは、会員同士の立ち話や意見交換が自然に生まれ、知的交流の促進にも寄与しました。ご出展いただいたナカニシヤ出版様、明石書店様に感謝の意を表します。

夕刻に実施されたハッピーアワーには、事前の想定を上回る多くの参加者が集まり、基調講演やシンポジウム、研究発表の内容を振り返りながら、終始和やかで活発な交流が行われまし

た。分野や世代、立場を超えた対話が自然に生まれ、本大会のテーマである「関係性」や「共創」を体感的に共有する場として、大いに盛り上がりを見せたことは特筆すべき成果がありました。

運営面では、開催校である東京未来大学の全面的な協力のもと、大会は円滑に進行いたしました。ハッピーアワー冒頭では、東京未来大学学長の塚本伸一先生にもご挨拶をいただき、また、会場校を担当された田中真奈美先生のご指導の下、ゼミ生の皆さんには会場係として受付や誘導、進行補助などで大きな役割を果たし積極的に運営を支えていただきました。心より感謝申し上げます。

一方、反省点として、本大会は初めて一日完結型のスケジュールで開催されたこともあり、内容をやや詰め込みすぎた結果、終盤のシンポジウムの時間帯には参加者に疲労の様子が見られました。今後、一日開催形式を採用する場合には、企画内容をより精選し、参加者の集中力や交流の質を確保する工夫が必要であることが確認されました。

なお、大会翌日には、田中真奈美先生のコーディネートにより、新大久保エリアでのフィールドワークが実施され、都市空間における多文化共生の現実を体感する機会が提供されました。筆者も参加しましたが、日本の多文化社会化を体感できる取り組みとして、有意義な企画となりました。

最後に、本大会の準備・運営に尽力された大会運営委員の先生方、東京未来大学の教職員・学生の皆さん、ならびに研究発表・討議・交流を通じて大会を支えてくださった参加者の皆さんに、心より感謝申し上げます。本大会が、ポストヒューマン時代における多文化関係研究をさらに深化させる契機となることを期待しています。

## 基調講演

### ポストヒューマン時代が照射する共生・共同の根本問題 — AI、ロボット、脱身体化がもたらす人間存在と関係性の未来 —

【講師】上柿 崇英 氏 大阪公立大学大学院 准教授

今年の基調講演は上柿崇英先生にご登壇いただいた。その内容は本大会のテーマ、すなわち、「多文化関係学アプローチが内包する社会課題への研究关心と学際的研究の推進」という二つの軸を、ポストヒューマンの時代においても進めていくうえで、現代社会の多文化関係をその前提から改めて問い直すことと通底するものであった。前回のNews Letter（第47号）には、「生成AIといった革新的なテクノロジー、コロナ以後のオンライン化の急速な進展、生命操作技術の進歩といった様々な条件を前提とした社会における多文化関係、そこで生じる『分断』、『多様性』、『社会的包摶』といったプロセスはいかなるものか、改めて問い合わせし、生きた地平を得たうえで、どのような研究、教育、社会実践が必要とされているのかを、学会内外からの参加者とともに議論する」といった期待の言葉が寄せられている。

上柿先生によると、人間は、技術革新のうねりと共に、コミュニケーション力を高めようと日進月歩の進化を遂げてきた。しかし皮肉にも、システム、技術の進化に比例するかのように、人ととの関わり方はより複雑化しているのが実情である。

こうした状況を背景に、上柿先生は第一に「ポストヒューマン時代とは何か？」と問いかける。そのうえで、次の2つの問題関心に眼差しを向ける。ひとつは「現実が人間以後になる」と実体／価値としての人間の存在は揺らいでしまう、というものである。そしてもうひとつは「人間以後の社会を思想的に考える」ならば、ポストヒューマニズムとは何かという根源的問いに立ち返らざるを得ない、というものである。

なお、上柿先生はポストヒューマニズムの主翼を担うAIに否定的ではない。ただし、「責任の主体」としての役割をAIに求めていることからも明らかなように、人間の「知」に代わる存在となるならば、相応の責務を負うのではないかとする立場を取る。なぜなら、上垣先生の言葉を借りるなら、歴史的な流れの中で、「思想上の問題に過ぎなかった『人間の終焉』が、『現象／社会的現実』としてのポストヒューマン化によって現実のものとなり、避けられない問題となってきた」からである。

第二は「〈自己完結社会〉の成立と関係性をめぐる矛盾」についてである。ここで上柿先生は、「神戸新聞（2016年11月4日付）」の記事を引く。それは、ある母親の提案、すなわち、総会において、「（防犯上の理由から）、マンション内での挨拶はやめましょう」という、ある母親の提案に、図らずも他の住民が呼応してしまい、告知せざるを得ないことに戸惑うマンション理事からの投稿であった。上柿先生は、そもそも、挨拶とは「あなたを人間として認めます」という意思表示であり、それをしないのを由とするのは「生身の人間との関わりに対するある種の恐れ」の表れであるとする。そのうえで、技術、システムへの依存が進むにつれ、遠からず、半径10mさえ見えていれば、誰とも関わらずに生きていける社会が到来してしまうと警鐘を鳴らす。なぜなら、こうした社会にあっては、古くから「『集団的生存』の実現を求める、コミュニケーション力の向上に努めてきた人類が、その最果てに他者と関わることを忌避する世界を築きあげた」という逆説的な結論が導き出されてしまうからである。



第三は「ポストヒューマン時代が照射する〈自己完結社会〉」についてである。上柿先生によると、インターネットは生身の人間の介在なしに「楽しい時間」を得たり、情報を収集したりすることを可能とした。結果、人付き合いの良い面は後景化し、煩わしさばかりが強調されるようになった。本来、生きるということは、意のままにならない生を生きることであり、意のままにならない他者との関わりを必要とする。図らずも、意のままになる生が実現すると、意のままにならない現実が無限に吹き出し、かえって辛さが深まるという矛盾を無限化してしまう。加えて、上柿先生は〈自己完結社会〉における3つの理念、すなわち、「『存在論的自由』の拡大」、「『自己決定』の拡大」、「『自己実現』の拡大」を掲げ、これらが「『脱身体化』を促進する」と語る。そして、ロボット、アバターなどに見られる「脱身体化」は、これまで克服が困難だとされてきた生来的な不平等の克服の一助になるとも主張する。しかしそうなると、人間は、他者との関わりを可能な限り排除し、「容姿や属性を含む『生ま

れつき』の不条理」を取り除いた社会においての「ポストヒューマン的な存在」を目指すという新たな逆説も生じてしまう。上柿先生が、「トランスヒューマニズム」という言葉を用いて、新たなポストヒューマン像を描き出そうとしたのも、かような逆説に抗い、進化を止めないシステム、技術と生身の人間の共生・共同の在り方を問おうとしたためだと言えるだろう。

第四は「矛盾が照射する 共生／共同の根本問題」についてである。ここでまず、上柿先生は「熱鉄の比喩」を用いる。それは、諦めなければ熱い鉄の棒を素手で持てようになると諭す先生と、実現に向けて、風呂温度の設定を高めて身体を慣らすことからはじめたいとする生徒の間の奇妙なやり取りから成る。ここで上柿先生は、「例えば腕を機械の腕に変えれば、熱鉄を持つことができる。しかしそれが実現すると、かえって今度は生身の足が、腰が熱鉄を受けつけないことを理不尽に感じるようになってしまう」と説き、「人間存在は『意のままにならない生』から逃れられず無間地獄に陥る」と結論する。そのうえで、現代社会では意のままにな

らない他者と生きることが必要であり、そうした考え方を肯定するための意味と知恵が人間に問われているとする。これは、脳の命令で動くアバター世界を生きるだけでは補えない知見を得るうえで不可欠な過程であり、ポストヒューマニズムの再考に繋がる作業であるとも言えるだろう。上柿先生が、「『意のままにならない生』の現実に寄り添い、肯定し、人々がそれでもより良く生きようと前を向いていけるための思想であり技術（作法や知恵）」の必要性を結びに説いたのも、ポストヒューマニズムの未来を決して諦観していないためだと思われる。

基調講演後のフロアとの質疑応答では、マンション理事の投稿記事を踏まえ、「（われわれは）儀礼が最小化される社会に向かっているのか」という問い合わせがなされたり、都会と田舎

でのポストヒューマン度の高低についての意見が交わされたりした。また、共同体を昔のムラ社会に、コミュニティを自己完結の進む先にたどえる声も上がっていた。示唆に富んだ基調講演は、ポストヒューマン時代を迎える中、飛躍的な進歩を遂げる技術、システムとの共生・共同の在り方を考察するうえでの導きの糸となる時間であった。

報告者 千葉美千子（北海道大学大学院  
メディア・コミュニケーション研究院研究員）

\* 上柿先生の当日の講演の様子は、以下のYouTubeのリンクからご覧になれます：  
<https://www.youtube.com/watch?v=HR2qr2ATl7k>

## ▶ 第24回年次大会特集

### 「縁側」知シンポジウム

#### 大会シンポジウムに参加して

小坂貴志（東京国際大学）

大会テーマ「ポストヒューマン時代の多文化関係～「分断」「多様性」「社会的包摂」を問い合わせ直す～」のもと、上柿崇英先生（大阪公立大学大学院准教授による基調講演「ポストヒューマン時代が照射する共生・共同の根本問題—AI、ロボット、脱身体化がもたらす人間存在と関係性の未来—」を受け、さらに大会テーマを深堀して話題の幅を広げるべく、シンポジウムのテーマ「ポストヒューマン時代のコミュニケーション学—関係性と主体を問い合わせ—」を掲げて、ファシリテーター石黒武人先生（立教大学）の旗振りによって、3名のシンポジストである谷島貫太先生（二松学舎大学）、森田系太郎（立教大学）、小坂がそれぞれのトピックについて語りあう時間となった。各シンポジストの語りの内容については、大会抄録または『ポストヒューマン時代のコミュニケーション学 モ

ノと主体の関係を問い合わせ直すための視点と事例』（ナカニシヤ出版）の各担当章をご覧いただきたい。



今回のシンポジウムは、日本コミュニケーション学会副学術局長である谷島先生、社会デザイン／ジェンダー研究をご専門とされる森田先生にご参加いただき、他学会・分野との相互交流を促進させる目的で、石黒先生の発意により企画が整い、試験的に運営された。企画の起源となる日本コミュニケーション学会コミュニケ

ーション理論研究会のミーティングから始めると、おそらく5年以上に渡る長丁場の共同研究活動であり、その成果を多文化関係学会の年次大会で共有できたことは意義深く、特に、ファシリテーターの石黒先生にとっては、同書の編著者でもあることから、感慨深いものがあったのではないかと推察している。



今回のシンポジウムが試験的だったもう一つの理由は、一日開催という時間的制約の中、運営された点である。ランチ総会の直後に開催された基調講演では、上柿先生による情報量・情報の質ともに期待をはるかに上回るお話しがあり、その後、個人研究発表や「縁側」タイム、方法論別セッションを挟んでの午後5時25分からのシンポジウム開始となったこともあり、会場へ足を運ぶ方々の足取りも少し疲れ気味だった印象をシンポジウム開始直前・直後に受けた。疲れもあったのか、それとも時間的制約のせいだったか、会場とのやりとりが限られていたが、

ご来場いただいた方々の総意を総括するかのように、基調講演者の上柿先生からご質問・コメントをいただけたのは貴重な締めとなつた。

ハッピーアワーでの語り合いでは、シンポジウムにご参加くださった方々の疲労感かに思えたものは一瞬もその表情に表れることなく、あっという間に時間が過ぎ去った。早めに会場を後にするもよし、とことん最後まで残るもよし、はたまた、翌日のポストカンファレンスを楽しむもよし、参加者の都合に合わせて自由に参加できる大会となつた気がする。

## 交流企画

### 相互交流「縁側」タイム（名刺交換会） 関心があるテーマと方法論をめぐって

**【ファシリテーター】叶尤奇（神田外語大学）  
藤美帆（広島市立大学）  
岡部大祐（順天堂大学）  
小林浩明（北九州市立大学）  
石黒武人（立教大学）**

本年次大会では、「縁側」知を体現するための試みとして、大会参加者間で領域を超えてテーマや方法論について気軽に話ができる場が設定された。本学会では、学会創設20周年記念誌『「縁側」知の生成にむけて—多文化関係学という場の潜在力—』(明石書店)において「縁側」知という概念が提示されて以降、その具現化に向けた数々の取り組みが行われてきた。具体的には、年次大会、地区研究会、CHA (Co-creating Horizontal Association)会での場づくりである。そこでは、異なる分野の人びとが互いの分野を超えて交流しつつ、現代の複雑な社会課題の向き合うために、新たな知の創発につながる場が提供してきた。今回のセッションも、その「縁側」知活動の一環として企画された。

本セッションは2部構成であり、前半はテーマ、後半は方法論に関する対話の場が設定されてい

た。各セッションはいずれも、1) 参加者が入室時にマーカーペンでA4用紙に自身の興味関心を書く、2) 全体で輪になってA4用紙記載の興味関心を見せながら簡単な自己紹介をする、3) 興味関心が近い人同士で自主的に集まってグループを作る、4) グループごとに自由に相互交流を行うという流れで進められた。途中入退室自由の両セッションでは、各回ともに概ね10名程度の参加者が集まり、各自の興味関心に応じて流動的にペアやグループの形態を変えながら対話がなされた。笑い声溢れるグループ、アカデミックで知的な会話に花を咲かせるグループ、各自が抱える葛藤を共有するグループなど、それぞれの対話の在り方は多様であった。これは、取り止めのない話であっても良いという気楽で、気軽で、自由な場としての前提が意見交換をより活発にさせた結果であろうと思われる。



「縁側」は日本家屋における内と外との間に属し、外来の客は完全に家屋に入ることなく腰掛け、世間話をするといった相互関与が発生する場である。本セッションは、まるで「縁側」でお茶を飲みながら誰かと話をするように、できるだけ気楽に、気軽に、相互に交流し、学び合い、その学び合いの過程で得られた「縁側」知を自身の研究や教育につなげていくための場であった。そこには、共通の关心をもちながらも学問的背景が異なる者同士だからこそ広がり、

また、深まる対話があった。それにより、会場には複数の知が横断的に交わり合う豊かな時間が流れていた。まさに、多文化関係に心を寄せる方が訪れ、対話し、新たなアイディアを想像/創造し、自らの研究・教育・実践に帰っていく、「縁側」としての場であった。こうした場をきっかけに、新たな共同研究の種が生まれることを期待したい。

報告者：藤 美帆（広島市立大学）

## ▶ 第24回年次大会特集

### ポストカンファレンス

#### フィールドワーク 新大久保散策ツアー

【コーディネーター】田中 真奈美（東京未来大学）

年次大会の翌日である10月5日（日）に、「ポストカンファレンス：フィールドワーク新大久保散策ツアー」が、コーディネーターの田中真奈美先生（東京未来大学）のもとで実施された。秋晴れのなか、参加者8名が11時にJR大久保駅南口に集合し、まず駅近くの「東京媽祖廟」を参拝した。カラフルな外観が印象的なこの廟は、在日台湾人を中心とする華僑によって建立されたものである。内部も本格的な装飾が施されており、航海や漁業の守護神である媽祖をはじめ、

恋愛や財産などを司る多様な神々が各階に祀られている。渋谷百代先生（アジア太平洋無形文化遺産研究センター）の解説を聞きながら、1階から4階までを順に見学した。各階には香炉が設置されており、参加者は1階で事前に購入した線香を供えた。その後、大久保通りへ移動し、ハラル対応の中国料理店で昼食をとった。メニュー選びの際には、中国人留学生の夏晨陽氏（北海道大学大学院）が手助けをしてくださった。



東京媽祖廟の外観



東京媽祖廟の内観

午後は田中先生の案内のもと、中国系店舗が並ぶ通りを進み、JR新大久保駅手前を左に入った「イスラム横丁」と呼ばれる一角を訪れた。そこには、ハラル食材を扱うスーパーマーケット、SIMフリー携帯電話の中古販売店、南アジア・東南アジア系住民向けの海外送金所などが軒を連ねていた。数軒の繁盛しているスーパー

マーケットを見学したところ、多様なスパイスや豚肉以外の食肉が販売されていた。1点4,700円の大型野菜が販売されていたため店員に尋ねたところ、「アフリカのイモ」との説明を受けた。来店客の多くは、外見や服装からイスラム圏出身とみられる外国人であった。

続いて大久保通りを東に進んだ。この一帯では、通行人の多くが若い日本人女性であった。JR新大久保駅東側は、いわゆる「コリアンエリア」であり、韓国コスメの専門店が数多く立ち並んでいる。各所にある韓国屋台風の路面店には行列ができていた。老舗の韓国スーパー・マーケットである「ソウル市場」では、店内にK-pop音楽が大音量で流れ、商品棚には日本語による説明POPが掲示されていた。韓国食品に加え、韓国のグッズも多数販売されていた。



イスラム横丁のスーパー・マーケット

職安通りへとつながる細道も非常に賑わっており、「新大久保アイドル」と呼ばれる地域密着型の韓国人男性グループによるPR活動や、日本人布教にも積極的な韓国人教会によるポケットティッシュ配布の様子にも遭遇した。途中には認可保育所「ほっぺるランド新大久保」があり、敷地の壁面に掲示された案内が多言語表記であることも確認された。14時過ぎに参加者全員で簡単な振り返りを行い、現地解散となった。



大久保通りと職安通りの間の細道

以下は筆者の感想である。帰路、JR新大久保駅構内に「日韓友好の象徴」とされるプレートが設置されていることに気づいた。これは2001年、ホームに転落した男性を助けようとして線路に降り、列車にはねられて亡くなった韓国人留学生と日本人を追悼するものである。当時は日韓ワールドカップや韓流ブームの前であり、新大久保は韓国人が集住するコリアンタウンの一つに過ぎなかった。しかし今回のフィールドワークで確認できたのは、大まかにいえば、半分は多国籍化した、もう半分は観光地化した現在の新大久保の姿であった。今後、この地域がどのように変化していくのか、引き続き注目ていきたい。



JR新大久保駅構内のプレート

報告者 野口 生也（東京福祉大学）

## 【多文化関係学会第25回年次大会のご案内】

開催校：神田外語大学（大会運営委員長：叶尤奇先生・申知元先生）

開催場所：神田外語大学海浜幕張キャンパス

開催日：決定次第後日ご案内いたします。

# 2025年度多文化関係学会 理事会議事録 抄録

## ■ 第1回理事会 議事要旨

日時：2025年5月25日（日）15時30分～16時30分

場所：オンライン開催

出席：石井英里子，石黒武人，奥西有理，笠原正秀，久保田真弓，河野康成，坂井二郎，猿橋順子，渋谷百代，當銘美奈，水松巳奈，奴久妻，矢元貴美，横溝環

欠席（委任状）：中野祥子，叶尤奇

議事に先立ち、笠原会長より挨拶があった。

## 1. 報告事項

### (1) 事務局報告

5月25日現在の会員数：244名（正会員198、学生41、シニア5）

ただし、2024年度の年会費納入者は、156名（正会員132、学生22、シニア2）となっている。

3年間会費未納者については、除籍対象者として整理し、今後対応する。

### (2) 各委員会からの報告及び2025年度活動報告について

#### 1) 財務委員会

2024年度決算書の監査が終了し、2025年度予算案を作成した。

#### 2) 地区研究会委員会

北海道・東北：7月26日に「札幌圏のイスラーム：誰もがつながりあう共生の街づくりとムスリム」をテーマとして研究会を開催する。（於藤女子大学）

関東：8-9月頃に研究会開催を予定している。

関西・中部：今後、研究会の計画を立てる。

中国・四国：11月頃に研究会（オンライン）開催を予定している。

#### 3) 学会誌編集委員会

第22巻への投稿を5月10日に締め切り、8件（原著論文）の投稿があった。17日に編集委員会を開催し、査読手続きに入った。また、委員会内で学会誌オンライン化に向けた具体的な方法等を検討中である。

#### 4) ニューズレター委員会

第47号を6月初旬に発行する。また2026年2月に第48号の発行を予定している。

#### 5) 学術委員会

特定課題研究については前回応募がなかったため、今後の募集に向けて、募集時期やテーマ、審査の形式など制度の見直しを行う。また、リサーチワークショップについては、今年度複数回実施を目指している。

#### 6) Web管理・広報委員会

MLの配信や学会ウェブサイトの更新をこれまで通り行う。

#### 7) 選挙管理委員会

今年度は理事選挙がないため、年度中に選挙のあり方についての整理・準備をしたい。

### (3) 2025年度第24回大会運営委員会報告

第24回大会は、東京未来大学に於いて10月4日に開催する。テーマを「ポストヒューマン時代の多文化関係：『分断』『多様性』『社会的包摂』を問い合わせる」とし、基調講演、シンポジウム（日本コミュニケーション学会との共催）、名刺交換会やポストカンファレンス（新大久保フィールドワーク）も予定している。申し込み案内メールを会員MLで近日配信することにしている。

#### (4)その他

- ・インターブックスに依頼した学会誌バックナンバーの在庫については、4月に廃棄処分を済ませた。また同社から過去の学会誌PDFファイル一式およびJ-StageへのアクセスIDとパスワードなどの情報についても引継ぎが行われた。
- ・旧会員サイトのサーバーの解約について、業者への連絡を行う。

## 2. 審議事項

### (1) 2025年度予算（2024年度決算含む）について（資料1, 2）（財務委員長）

監査を受けた2024年度決算書（資料1）が提示された。その際、新たな会員システムの運用により、過年度の年会費納入があり収入が予算を上回ったこと、他方、支出については予算内に収まつたこと、が説明された。審議の結果、提案通り臨時総会に提案することが承認された。

続いて2025年度予算案について、資料2に基づいて提案された。会費未納会員の除籍などが一定数見込まれる頃から会費収入については控えめに計上していること、また学会誌のオンライン化に伴い関連する支出に変動が見込まれるが現時点では明確な金額が提示できないために前年度と同規模の金額を計上していることの説明があった。審議の結果、上記事情より後日修正がある可能性を踏まえた上で承認された。

### (2) 学会誌のオンライン化（資料3）

既に理事会で承認された学会誌のオンライン化（資料3）について、臨時総会に提案することの確認がされ、審議の結果、承認された。

その際、オンライン化とともに

- ・J-stageでオープンアクセス化が望ましい
- ・CiNiiへのリンクも検討したい
- ・（紙の学会誌が手元に届かなくなるという意味での）会員メリットへの影響について検討し、必要に応じて今後理事会に諮りたい

等が編集委員会内で現在議論されていること、またDOI取得やISBN取得などの手続きについて今後進めていくことが報告された。オンライン化の具体的な方針などについては今後も適宜理事会に諮り進めていくことが確認された。

### (3) 石井賞評価基準について

継続審議事項ではあるが、学術委員会案がまだ提案には至らないため、審議を延期することになった。

### (4) 会則改定について（資料4）

理事の任期途中の任命・交代に関連する会則の変更について、資料4に基づき提案されたが、継続審議となった。

以上

\* 第2回理事会

2025年7月または8月開催予定（後日調整）

## ■第2回理事会（メール審議）議事録

日時：2025年9月11日～18日, 23日～30日（追加審議）

場所：メール審議

出席（敬称略、以下同）：石井英里子、石黒武人、奥西有理、笠原正秀、坂井二郎、猿橋順子、渋谷百代、當銘美菜、中野祥子、奴久妻駿介、水松巳奈、矢元貴美、横溝環、叶尤奇

## 1. 審議事項

- (1) 多文化関係学会会則の6「役員」の改定について、審議の結果、提案の通り承認された。
- (2) 学会誌オンライン化に向けた学会誌編集委員会の計画（オープンアクセス化、DOI手続き、編集体制）について、審議の結果、提案の通り承認された。但し、学会誌の購入による収入がなくなることによって学会の財政がひっ迫していく可能性を孕んでいるため、その点については改めて確認が必要との指摘があった。

[追加審議]

### ●学会誌デジタル化に伴う投稿規程の改訂について

学会誌のデジタル化に伴い投稿規程の変更が必要になるため、改定案が示された。審議の結果、以下を修正の上承認された。

- ・編集委員会の連絡先はメールアドレスのみにし、住所は削除する。

- (3) 学会誌特集号について、提案のあった企画案（「外国人女性のライフキャリア」）については、審議の結果、承認された。

[追加審議]

### ●今後の特集号のあり方について

発行頻度、企画の設定、編集体制について審議した結果、詳細については引き続き審議していく必要があるが、以下の方向性が提示された。

- 1) 今回試験的に実施後、状況を整理し制度設計する。2年に1回程度の発行を検討する。
- 2) 有志による企画提案方式、理事会・学術委員会がテーマを提示して参加者を募る方式を併用。年次大会や特定課題研究との連携も検討する。
- 3) 学会誌編集委員とは別の特集号専任の編集グループを設定する。
- 4) 特集号であっても学会誌の質を保証する仕組みづくりを検討する。

- (4) 石井奨励賞については、多数の論点が提示されたため、評価基準、応募資格、審査方法の見直しに絞って審議を行った結果、それぞれ見直す方向での合意を得た。今後、これまでの議論を整理しながら、具体的な見直し案に向けて審議を継続する。

<資料>

[案1]多文化関係学会会則 改定案【審議事項(1)】

〈現行〉	〈改定案〉
<p>6. 役員</p> <p>この会は次の役員を置く。</p> <p>(1) 会長1名 理事会から選出され、この会を代表し会務を統括する。</p> <p>(2) 副会長2名以内 理事会から選出され、会長を補佐する。</p> <p>(3) 理事10名程度 学会員による選挙で選ばれ、総会で承認を得た後任命される。</p> <p>(4) 特任理事若干名 理事会から選出され、総会で承認を得た後任命される。海外での理事として、学会に寄与することを使命とする。特に任期は定めず、会費は徴収しないものとする。</p> <p>(5) 監事2名 理事会から選出され、この会の会計を監査する。</p> <p>(6) 顧問 理事を辞任した者のなかから、学会に対する貢献が著しいと認められた者に対して、理事会が「顧問」という役職を選出することができる。その場合、総会の承認を得る。</p> <p>(7) 会長・副会長は理事会において互選により決め、総会の承認を得る。</p> <p>(8) 役員の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。その場合でも理事は3期6年を越えて引き続き留任することはできない。</p>	<p>6. 役員</p> <p>この会は次の役員を置く。</p> <p>(1) 会長1名 理事会から選出され、この会を代表し会務を統括する。</p> <p>(2) 副会長2名以内 理事会から選出され、会長を補佐する。</p> <p>(3) 理事10名程度 学会員による選挙で選ばれ、総会で承認を得た後任命される。なお、理事に欠員が生じたときは、理事会が会員から選出できる。その場合、選出後直近の総会で承認を得た後任命される。</p> <p>(4) 特任理事若干名 理事会から選出され、総会で承認を得た後任命される。海外での理事として、学会に寄与することを使命とする。特に任期は定めず、会費は徴収しないものとする。</p> <p>(5) 監事2名 理事会から選出され、この会の会計を監査する。</p> <p>(6) 顧問 理事を辞任した者のなかから、学会に対する貢献が著しいと認められた者に対して、理事会が「顧問」という役職を選出することができる。その場合、総会の承認を得る。</p> <p>(7) 会長・副会長は理事会において互選により決め、総会の承認を得る。</p> <p>(8) 役員の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。その場合でも理事は3期6年を越えて引き続き留任することはできない。</p> <p>(9) 役員が任期途中で就任した場合、任期は前任者又は他の在任役員の任期の残存期間と同一とする。</p>

[案 2-1]多文化関係学会『多文化関係学』(Multicultural Relations)投稿規程 改定案【審議事項 2  
追加審議】

<p>〈現行〉 (出版にかかる追加費用) 第 16 条 図版・写真印刷、カラー印刷、校正等により追加費用が発生する場合には、必要に応じて実費を徴収する。 (別刷り) 第 17 条 別刷りを希望する場合、筆頭著者に対し実費で頒布する(30 部単位)。共著者が別刷りを希望する場合には、筆頭著者を通じて申し込むものとする。 (著作権および版権) <b>第 18 条</b> 掲載された論文・記事の著作権は著者に、版権は当学会に属する。著者はまた、当学会による当該論文の電子化および公開(委託を含む)を承諾するものとする。(以下省略) (冊子体版・オンライン版双方への掲載承諾) <b>第 19 条</b> 本学会誌には冊子体版と電子媒体版の 2 形態がある。投稿にあたっては、2 形態への掲載を承諾するものとする。 (規程の改廃) <b>第 20 条</b> (略) (投稿・連絡先) <b>第 21 条</b> 原稿の投稿先および連絡先は下記の通りである。 投稿原稿送付先: email: jsmrsubm@js-mr.org 問い合わせ先:『多文化関係学』編集委員会 email: jsmr.editorialboard@gmail.com 住所: 〒700-0005 岡山県岡山市北区理大町 1-1 岡山理科大学教育学部 奥西有理研究室</p> <p>[付録] 1. 投稿区分について(ア)~(オ) 【分量】図表・注・参考文献すべて含め、(以下省略)</p>	<p>〈改定案〉 (削除) (削除)</p> <p><b>第 16 条</b> 掲載された論文・記事の著作権は著者に、版権は当学会に属する。著者は、当学会による当該論文の電子化および公開(委託を含む)を承諾するものとする。(以下省略) (オンライン版への掲載承諾) <b>第 17 条</b> 本学会誌は電子媒体である。投稿にあたっては、オンライン版への掲載を承諾するものとする。 (規程の改廃) <b>第 18 条</b> (略) (投稿・連絡先) <b>第 19 条</b> 原稿の投稿先および連絡先は下記の通りである。 投稿原稿送付先: email: jsmrsubm@js-mr.org 問い合わせ先:『多文化関係学』編集委員会 email: jsmr.editorialboard@gmail.com (削除)</p> <p>[付録] 1. 投稿区分について(ア)~(オ) 【本文分量】図表・注・参考文献を含め、(以下省略)</p>
--	---

[案 2-2] Submission Guideline for *Multicultural Relations* 改定案【審議事項 2 追加審議】

<p>〈現行〉</p> <p>Article 16: Additional Costs for Publication If graphics, <u>color</u> printing, proofreading, and other special requirements lead to cost overruns for a manuscript, the author(s) will be charged the actual additional costs incurred.</p> <p>Article 17: Reprints The principal author of a published manuscript may purchase the reprints of the manuscript (at the increment of 30 copies) for a nominal fee. Co-authors may place the reprint purchase order through the principal author.</p> <p><u>Article 18</u>(略)</p> <p><u>Article 19</u>: Publication Formats The journal is available in <u>two formats: print and</u> electronic. <u>When</u> submitting a manuscript, the author agrees to <u>publish it in both formats.</u></p> <p><u>Article 20</u> (略)</p> <p>All enquiries and manuscripts should be sent to the address below: Email: <a href="mailto:ismrsubm@js-mr.org">ismrsubm@js-mr.org</a> <u>Yuri Okunishi, Editor-in-Chief,</u> <u><i>Multicultural Relations</i></u> <u>Faculty of Education, Okayama University of Science</u> <u>1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama-shi,</u> <u>Okayama 700-0005 JAPAN</u></p>	<p>〈改定案〉</p> <p><u>(削除)</u></p> <p><u>(削除)</u></p> <p><u>Article 16</u>(略) <u>Article 17</u>: Publication Formats The journal is available in electronic <u>format</u>. <u>By</u> submitting a manuscript, the author agrees to <u>its online publication.</u></p> <p><u>Article 18</u> (略)</p> <p>All enquiries and manuscripts should be sent to the address below: Email: <a href="mailto:ismrsubm@js-mr.org">ismrsubm@js-mr.org</a> <u>(削除)</u></p>
--	---

[案 2-3] 多文化関係学会誌『多文化関係学』(Multicultural Relations)執筆要領【審議事項 2 追加審議】

<p>〈現行〉</p> <p>第9条 表中 表題ページ(別ファイルで<u>保存</u>すること)</p>	<p>〈改定案〉</p> <p>第9条 表中 表題ページ(別ファイルで<u>作成</u>すること)</p>
--	---

[案 2-4] Multicultural Relations: Instructions for Authors 改定案【審議事項 2 追加審議】

<p>〈現行〉</p> <p>Article 9 表中 Title page (<u>saved</u> in a separate file)</p>	<p>〈改定案〉</p> <p>Article 9 表中 Title page (<u>prepared</u> in a separate file)</p>
--	--

# 2025年度多文化関係学会 総会議事録 抄録

## ■2025年度 臨時総会 議事要旨

日時：2025年5月25日（日）16時30分～17時00分

場所：オンライン開催

渋谷百代会員（IRCI/沖縄大学）が議長を務めることが承認され、開会した。

## □審議事項

### (1) 2025年度役員案

2025年度役員が提案され、提案通り承認された。

### (2) 2024年度決算報告（資料1）

2024年度の収支決算（資料1）について、監査の結果が報告された。新しい会員管理システム運用開始に伴い、過年度の会費納入があったため予算を上回った旨が財務委員長より説明された。審議の結果、承認された。

### (3) 2025年度活動計画

#### 1) 事務局（事務局、財務委員会）

会員数は244名（一般198名、学生41名、シニア会員5名）。ただし、2024年度会費納入済みの会員は、一般132名、学生22名、シニア会員2名（2025年5月25日現在）。

#### 2) 地区研究会委員会

北海道・東北地区、関東地区、関西・中部地区、中国・四国地区の各地区より、今年度の研究会予定等の説明があった。

#### 3) 学会誌編集委員会

第22巻について、5月10日に投稿を締め切り、編集作業を開始した。

#### 4) 学術委員会

特定課題研究の制度見直しを行う。リサーチワークショップは複数回実施を予定している。

#### 5) ニュースレター委員会

例年通りの発行スケジュール（6月、2月）に従い、NL編集の作業を行う。

#### 6) Web管理・広報委員会

MLやウェブサイトによる発信等について継続して行っていく。

#### 7) 第24回大会運営委員会

第24回大会（10月4日、於東京未来大学）の準備を進めている。テーマは「ポストヒューマン時代の多文化関係～『分断』『多様性』『社会的包摂』を問い合わせ直す～」

各委員会より上記の通り活動計画が示され、すべて承認された。

### (4) 2025年度予算案（資料2）

資料2に基づいて2025年度予算案が説明・提案され、承認された。

なお、学会誌のオンライン化に伴い関連する支出に変動が見込まれるが現時点では明確な金額が提示できないために前年度と同規模の金額が計上されている。

### (5) 学会誌のオンライン化について（資料3）

学会誌『多文化関係学』のオンライン化について、資料3に基づいて説明・提案がなされ、原案通り承認可決された。

以上をもって議事をすべて終了し、議長の任を解き、閉会した。

以上

## ■2025年度総会 議事要旨

日時：2025年10月4日（土）12時15分～13時00分

場所：東京未来大学 B棟321講義室

### 式次第

会長挨拶

第24回年次大会運営委員長挨拶

議長の選出

#### 報告事項

- (1) 臨時総会報告（副会長）
- (2) 事務局長及び各委員会の委員長紹介（事務局長、各委員会委員長）
- (3) 理事会報告（副会長）
- (4) 第23回（2024年度）年次大会会計報告
- (5) 第25回（2026年度）年次会大会について

#### 審議事項

- (1) 会則および投稿規程・執筆要領の改訂について

議長解任

閉会の挨拶（副会長）

以上

## 地区研究会報告

### ■北海道・東北地区研究会報告

日 時 : 2025年7月26日（土）10:30～12:45

開催方法 : 対面（藤女子大学北16条キャンパス）およびオンライン開催（Zoom）

講 師 : 森下義亜（IMMO 理事・北海道大学イスラーム文化クラブ フェロー）

テー マ : 札幌圏のイスラーム：「誰もがつながり合う共生のまちづくり」とムスリム

今年の研究会は二部構成となっており、第一部では森下義亜先生を講師に迎え、近時、地域社会の隣人として存在感を増しつつあるイスラーム信仰者、すなわちムスリムの人々との共生の在り方についてお話しをいただいた。はじめに、イスラームという教えの基本及びそれを共有する人々から成るイスラーム共同体の力と特徴が紹介された。森下先生によると、イスラームの思想は「自然の法則の中で生きる」ことを基底とし、ムスリムとそうでない者の違いは「気づいているか／否か」、「実践するか／しないか」という2点に集約される。かれらは現世での生き方が神に試されている。さらにいえば、六信（唯一神、天使、啓典、預言者たち、来世、運命）五行（信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼）を礎とするムスリムには、聖典『クルアーン』と預言者の言行録『ハディース』があるため生き方についての「迷い」がない。ムスリム

の信仰心の厚さとコミュニティの強く広いつながらに照らして、「『見えないものを信じて協力できる能力』を備えているのは人間だけである」と語る森下先生の眼差しは、多文化共生社会が向かうべき未来に向けられていたと言えるだろう。なお、講演中には様々な写真が紹介された。特に、（Vサインではなく）唯一神への信



仰を意味する人差し指だけを立てた人々の笑顔が溢れる集合写真は、ムスリムの信仰心が日常生活の中で息吹いている証左となっている。

次いで、森下先生は、本年4月1日に施行された札幌市の「共生のまちづくり条例」を引きながら、札幌圏のムスリムとの共生の在り方を問い合わせた。今日、札幌圏に居住するムスリムは、医学／工学といった科学分野の研究者として、あるいはビジネス／介護の担い手として活躍している。かれらは、日本人との関わりが弱い集団（礼拝施設運営者、出稼ぎ移民コミュニティ在住者、短期滞在の学生・研究者とその子ども、移民二世・三世等）と強い集団（日本人の友人、同僚がいる人、改宗した日本人配偶者がいる人、移民二世・三世等）に大別され、地域社会との共存志向・共生志向にも差が見られる。移民二世・三世が双方に組み入れられているのは、かれらの生育環境が日本社会との関係性に浅からぬ影響を与えているからだと推測される。

第二部は札幌マスジド（モスク）の見学であった。モロッコ系フランス人のムスリムであ

り、北海道大学日本語・日本文化研修生として来日しているサミール・タクファウイ氏による事前説明の後、同施設を訪問した。まず、参加者の眼前に広がったのは厳粛な祈りを捧げる男性信徒の姿である。礼拝終了後は、イスラームについて導師にお話しいただいた。それはたとえば、偶像崇拜ではないため祈りの対象には「顔」を描かないこと、祈りはメッカの方角を向いて行うこと、導師が説教する金曜日の集団礼拝日には約300名のムスリムが集うのを常としている、というものであった。次いで、各階の案内があった。印象深かったのは、キッズルームとミニキッチンを備え、乳幼児を連れた礼拝を可能とする女性の礼拝室である。土曜の午後は非ムスリムとの交流の場として開放されていることも、特筆に値すると言えるだろう。

見学終了後、同施設近くのパキスタン料理店でランチ会が開催された。カレーに舌鼓を打ちながらの意見交換の場では、時間の関係で講演中には質問できなかった問題関心について、特に日本語習得に関する意欲の高低が日常生活に



与える影響について踏み込んだ議論がなされた。その帰結として、ムスリムコミュニティの異質性や思考・生活様式の違いから派生する一般社会との軋轢、移民一世の老後の問題といった今日的課題があらためて共有された。言うまでもなく、他者との関わりは対人間、対社会との間で揺れ動くものである。そのようななか、関係

性のベクトルを良い方向に向かわせるための努力を「双方」が惜しまないことは多文化共生社会の実現の一助となる。約35名の参加者にとつても、この日は共生とは何かを考える有意義な一日になったと思料される。

報告者 千葉美千子（北海道大学大学院  
メディア・コミュニケーション研究院研究員）

## 地区研究会のご案内

### ■ 関東地区研究会

#### 多文化関係学会2025年度関東地区研究会のご案内

##### 【開催日程】

事前アンケートの結果を受け、2025年度の関東地区研究会の開催日程は下記の2日程に決定いたしました。

- 2026年2月14日（土）10時30分～13時30分
- 2026年2月21日（土）12時30分～15時30分

##### 【テーマ】

これまで一番気持ちを込めた研究

##### 【開催方法】

ハイブリッド式（対面およびZOOM）

対面参加の会場：

2026年2月14日（土）東京メトロ南北線 志茂駅 徒歩7分の古民家

2026年2月21日（土）JR巣鴨駅から徒歩5分の古民家

★会場の住所およびZOOMのURLは、開催日前日までに参加登録の方へ個別にご連絡いたします。

##### 【参加者の申し込み方法】

こちらのフォームより2月7日（土）までにお申し込みください。

<https://forms.gle/TdjwB36GjzGNJtjNA>

参加者（リスト）枠

- 発表を聴き、必要に応じて全体討論に参加していただきます。
- 参加形態は、対面およびオンラインのいずれかをお選びいただけます。対面参加につきましては、会場定員の都合上、先着順とさせていただきます。

## 【開催趣旨】

近年、多文化関係学会では、20周年記念事業として出版された『「縁側」知の生成にむけて：多文化関係学という場の潜在力』（明石書店）を軸に、年次大会・地区研究会・CHA（Co-creating Horizontal Association）会を通じて、多様な領域間の相互交流と協働を促進してきました。「縁側」知は、縁側に出て世間話をするように、自分の領域の外の人びとと気軽に交流し、気づきを得て生まれる知を指しています。「気楽さ」「気軽さ」「楽しさ」を重視し、異なる領域にいる人びとが出会い、立ち話のようなやりとりから新たな発想が生まれる—この「創発」を学会で共有できる場づくりを目指してきました。

本研究会では、この「縁側」知の精神をもとに、参加者が自身の研究人生の中で「これまで一番気持ちを込めた研究」を語り合う場を設けます。研究は方法や成果だけでなく、背景に潜む個人的な問題意識、人生経験、葛藤、影響を受けた人びとなど、多様な「物語」に支えられています。しかし、通常の学会発表や投稿論文では、こうした研究者の「内側」は語られにくい側面があります。本研究会は、研究者が最も思い入れのある研究の背景や物語を語り、他領域の研究者と気軽に共有し、交流から新たな発想や視点の転換が生まれる「縁側」知の場をつくることを目的としています。

## 【発表者】

- 2026年2月14日（土）

原和也先生（順天堂大学）  
水松巳奈先生（東洋大学）  
李娜先生（信州大学）

- 2026年2月21日（土）

横溝環先生（茨城大学）  
杉下かおり先生（多摩大学）

## 【問い合わせ先】

**multicultural.kanto<AT>gmail.com <AT>を@にしてください。**

## ■ 関西・中部地区研究会

### 関西・中部地区研究会開催案内

関西・中部地区研究会では、2026年2月14日（土）13:00～15:00（予定）にオンラインにて、学員の皆様に調査・研究成果を発表していただく機会を設けます。博士論文や修士論文、フィールド調査や文献調査等の報告、地域連携活動や教育活動等の実践報告などをしていただき、情報共有やネットワーク作りに役立てていただければと考えております。現在、発表者を募集中です。発表申込方法等の詳細は学会のマーリングリストおよびウェブサイトにてご案内しておりますのでご覧ください。皆様のご応募をお待ちしております。

# お知らせ

## Web管理・広報委員会より

本学会のMLにて配信希望の情報（他学会で開催される研究会、教員募集等の情報等）をおもちの方がいらっしゃいましたら、横溝tamaki.yokomizo.drj@vc.ibaraki.ac.jp（全角の@を半角の@に変更してください）宛にご連絡ください。その際、配信する文面も添えてお知らせいただけすると大変助かります。何卒よろしくお願ひいたします。

## 学会誌編集委員会より

学会誌編集委員会では、現在、『多文化関係学』第22号の編集作業を進めております。本号より学会誌はオンラインジャーナルに完全移行し、第22号はウェブ上で公開される予定です。冊子媒体は作成・郵送されませんが、発行後すぐにオンラインで閲覧いただけます。よりアクセスしやすくなった学会誌を今後もぜひご活用ください。

※編集委員は随時募集しております。ご関心をお持ちの方はお気軽にお問い合わせください。  
<jsmr.editorialboard@gmail.com 『多文化関係学会』編集委員会>

## 学術委員会より

### 1. 第24回年次大会・「石井奨励賞」審査結果の報告

第24回年次大会における、石井奨励賞審査には2件の応募があり、学術委員会より選出された3名の審査委員が審査を行いました。抄録審査、口頭発表審査の結果、「該当なし」との報告がなされました。

石井奨励賞は次世代を担う研究者のキャリアを支援する制度です。応募資格に該当する会員の皆さまのご応募をお待ちしております。

### 2. 「特定課題研究」の募集を開始

過日、学会のメーリングリストでもお知らせいたしました特定課題研究募集のお知らせです。本学会では会員同士の相互学習・相互協力によるシナジー効果を狙う多文化関係学的研究のための特定課題研究の助成制度があります。採用された課題に対しましては、スタートアップ支援としまして、1課題につき年度ごとに最大10万円（活動補助金）を支給いたします（ただし、本学会会計年度内での支出に対する支援となります）。

大会や研究会での出会いから思いもよらない創造的な研究が生まれることもあります。そのきっかけとして本制度をご活用いただき、ぜひ学会の学術的活動の活性化にも寄与していただければ幸いです。

**募集期間**：2026年1月10日～2月28日

**審査結果**：3月中旬を予定

**申請方法**：学会ウェブサイト（募集要項、申請書、応募フォームを設置します）

**募集テーマ・分野**：特に限定しないが、本学会の目的（多文化関係学会会則第2条参照）にふさわしいものであるとともに、課題への取り組みに際して本学会の会員による研究連携によって取り組むことが可能であり、かつ研究連携が必要となるもの

**募集件数**：若干数

研究期間：2026年4月1日より2027年3月31日まで、もしくは2028年3月31日まで

採用者および研究メンバーの義務：

- A) 研究メンバー代表の選出および学術委員会への通知（研究課題応募者と研究メンバー代表が同じ場合も、学術委員会に通知すること）。
- B) 研究成果に基づき、多文化関係学会年次大会において成果発表を行うこと。
- C) 研究成果に基づく学術論文・研究ノート・研究発表等の成果物を公表する際に、成果物において「多文化関係学会特定課題研究」の成果である旨を明記すること。また、成果公表後はC)の研究報告書で成果物の題名、公表媒体ないし会議・研究会等の名称に加え、会議・研究会の場合は日時および場所を報告すること。
- D) 研究期間終了後の研究報告書の提出。なお、研究報告書は原則として一般に公開される。

**特定課題研究申請フォームはこちら：**

<https://forms.gle/L4iRaatvJwNzCZfF7>

会員のみなさまからのご応募をお待ちしております。



学術委員会では、今年度中に第3回リサーチ・ワークショップの開催を予定しています。詳細が決まりましたら、学会メーリングリストやウェブサイトで最新情報をご案内します。会員の皆さまのご参加をお待ちしております。

(学術委員会委員長 當銘美菜)

## 将来構想委員会より

毎回のご紹介となります、「将来構想委員会」は、長期的な視点から本学会の活動とその方向性について検討する委員会です。委員会は、会長に加え、会長の指名に基づき、副会長2名、事務局長、学会誌編集委員会委員長、財務委員会委員長、学術委員会委員長、ならびに年次大会の大会運営委員長で構成されます。2025年度は「将来構想委員会」としての会合はありませんでしたが、2025-26年度の体制では、笠原正秀会長を中心に、本学会の活動を活発化させ、かつ、持続可能な運営を実現できるよう、新しい試みに取り組んでおります。

まず、昨年10月4日に開催された年次大会に向けては、将来構想委員会のメンバーを含めた理事会の先生方のご賢察をいただきながら、対面開催として初の1日開催スケジュールで実施いたしました。会員の高い割合を占める大学教員の昨今の忙しさを踏まえ、1日に基調講演、シンポジウム、交流企画、研究発表、ポスター発表等を実施する、という盛りだくさんの内容となりました。大会運営委員長の大会総括でも述べられていますが、充実した内容であったものの、イベントを詰め込みすぎた感があり、夕刻には、参加者に疲れが見えました。こうした貴重な試行錯誤、経験を踏まえ、会員にとってより良い大会の企画・運営に向けて、時代のニーズを敏感に捉えながら、本学会の将来について構想をしていければと考えております。

上記のような活発な学会活動を推進しつつも、学会運営にかかる費用（学会誌発行等）の高騰や厳しい財務状況を踏まえ、理事会、総会での承認を得て、学会誌のオンライン化を進めてまいりました。下記の「学術連絡委員会」の報告に詳しいですが、学会誌編集委員長の奥西有理先生を中心に編集委員会のメンバーの先生方、執行部ならびに財務委員長が連携して学会誌のオンライン化を具体的に進めております。2026年度は、将来構想委員会を開催し、2027-2028年度体制へとつなげて行ければと考えております。

(将来構想委員会委員長 石黒武人)

## 学術連絡委員会より

「学術連絡委員会」は、執行部（会長、副会長、事務局長）、学術委員会、財務委員会、そして学会誌編集委員会といった複数の主体がかかわる学術面の案件を扱う会議体です。2025年度は、将来構想委員会の報告で触れましたように、学会の財政を圧迫する形となってしまっていた紙媒体の学会誌の発行ならびに在庫の管理費を解消し、学会誌のオンライン化を進めるため、学会誌編集委員長の奥西有理先生が中心となって学術連絡委員会のメンバーも連携しつつ、持続可能な体制を摸索し、形づくっているところでございます。学会誌編集委員会の先生方には本件のために多大なるご尽力とご賢察を賜り、深く感謝申し上げます。

(学術連絡委員会委員長 石黒武人)

## 若手会員リクルート委員会より

若手会員リクルート委員会が中心となって、昨年度は、院生、ポスドクや非常勤講師の先生方に年次大会に参加してもらいやすくするスカラーシップ制度を初めて運用しました。今年度も1件の申し込みがあり、採択されました。課題は、もう少し申請者数を増やすことです。今年は、大会サイトの発表申し込み箇所にスカラーシップの案内を掲載したり、発表者のうち該当者に個別に連絡したりする等の工夫をしましたが、さらなる周知が必要であると思われます。

また、今年も昨年に引き続き、年次大会準備委員会のご協力により、学部生や院生に年次大会に来てもらい、発表をしてもらう機会として特別枠でポスターセッションを実施しました。学部生、院生の皆さんの興味深い研究について、来場した方々からさまざまなコメントが示されました。発表者には、ランチ総会にて大会運営委員長から「奨励賞」の賞状が渡されました。こうした取り組みが若手会員の増加につながることを願っている次第です。



学部生による研究発表の様子

(若手会員リクルート委員会委員長 石黒武人)

## 事務局より

新春を迎え、皆様におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。本年も多文化関係学会の活動が、会員の皆様の研究と交流の場としてより一層充実したものとなりますよう努めてまいります。至らない点やご不便をおかけすることもあるかと存じますが、会員の皆様のご理解とご協力をいただきながら、精一杯取り組んでまいりますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。以下、事務局からのお知らせです。

### ■事務局所在地について

〒890-0005 鹿児島県鹿児島市下伊敷1-52-1

鹿児島県立短期大学 文学科 石井英里子研究室内 多文化関係学会事務局

\*Eメールアドレス [admin@js-mr.org](mailto:admin@js-mr.org) (全角の@を半角の@に変更してください)

事務局の所在地が上記に変更になりますと前回のニュースレターでお知らせいたしましたが、諸手続きの都合上、HP上の事務局は、しばらくの間、前事務局長の田中真奈美先生の研究室になっております。ご理解よろしくお願ひ申し上げます。

### ■学会ホームページ「学会員専用サイト」における登録情報の更新について

学会ホームページでは、登録情報の更新などを行える「学会員専用サイト」があります。昨年夏頃、新会員システムが導入されました。登録はおすすめでしょうか。まだの会員様はよろしくお願ひいたします。なお、領収書が必要な方は、「クレジットカード決済」を選択されることをお勧めします。即時領収書をダウンロードできます。

また、住所、所属等に変更がありましたら、ご自身で情報の更新してください。送付物等は新システムに登録されている住所へ自動的に送付されます。また学会のメーリングリストもこちらのシステムを経由して行いますので、常時確認が可能なメールアドレスでの登録をよろしくお願ひいたします。

なお、2023年12月末日で未登録の会員様については、事務局の方で既に学会に登録されているメールアドレスを登録いたしました。そちらでログインをしてください。パスワードを忘れた場合に進んでいただくと、パスワードが再発行されます。

### 多文化関係学会の学会員専用サイト

<https://jsmr.shikuminet.jp/login/>

なお、学会員専用サイトへのログインには、会員番号とパスワードが必要です。2023年夏頃、学会メーリングリストで登録に仕方を送信しております。そちらをご参照ください。

### ■学会費の納入について

2023年度の学会費納入より、会費納入システムを導入しております。学会員専用サイトより納入手続きをお願ひいたします。

(事務局長 石井 英里子)

## 新入会員紹介

(敬称略、入会順)

会員資格	氏名	所属	研究テーマ
学生会員	佐藤 謙成	Brave hearts 多文化共生政策研究室	多文化共生論
正会員	杜 長俊	北海道大学	多文化の話し合い、国際共修、地域日本語教育
学生会員	郭 仁敬	西南学院大学大学院	若者のコミュニケーション能力に対する意味づけ
正会員	伊藤 萌紅	立教大学 異文化コミュニケーション学部	レトリック・メディア・ジェンダーをトランスナショナルな視点から分析
学生会員	夏 晨陽	北海道大学	外国人と地域社会のダイナミクス
正会員	遠山 一明	横浜市立大学大学院都市社会文化研究科博士後期課程	日本文化論、比較文化論、多文化共生論
正会員	玉尾 章代	立命館大学	多文化共生
正会員	玉尾 文代	立命館大学	多文化共生

(2025年5月1日から2025年12月31日に入会された方)

## ニュースレター委員会より

### ■著作図書案内・書評・海外シンポジウム参加報告記事募集

ニュースレター委員会では、次回49号（2026年6月発行予定）掲載記事として、会員の皆様の著作図書案内、海外シンポジウム参加報告、震災関連や多文化関係学会に関連した研究、関連学会参加報告記事などを募集しております。以下（1）から（3）の記事をNL委員会に送ってくださいますようお願ひいたします。

#### 募集する記事の内容

（1）学会の趣旨に関連すると思われる著作・訳書などを出された場合

募集対象とする著作の発行時期：2026年1月から2026年4月末まで

書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の内容を200字程度で紹介してください

（2）学会の趣旨に関連すると思われる著作で、会員に広く紹介することが望ましいと思われる場合

募集対象とする著作の発行時期：2026年1月から2026年4月末まで

書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の書評を200字程度でまとめてください

（3）学会に関連する海外のシンポジウムや震災関連のシンポジウム、関連学会に参加された場合など

募集対象とする時期：2025年6月から2026年4月末まで

◆ 募集対象とする時期：2026年1月から2026年4月末まで

◆ 記事の送付期日：2026年5月6日

◆ 記事の送付先：NL委員会 坂井二郎 宛 jisakai@ed.tokyo-fukushi.ac.jp（全角の@を半角の@に変更してください）

### ■関連学会の大会紹介記事の募集

会員に紹介するのにふさわしい関連学会の大会情報を随時募集しております。具体的には、

（1）学会名、（2）大会名、（3）大会テーマ、（4）大会日時、（5）会場、（6）その他詳細（120字程度）をお書きのうえ、NL委員会委員長の坂井二郎宛 jisakai@ed.tokyo-fukushi.ac.jp（全角の@を半角の@に変更してください）に送ってくださいますようお願ひいたします。

（NL委員会委員長：坂井 二郎）

## 編集後記

ニュースレター第48号をお届けいたします。今号は、第24回年次大会の特集号です。今年度の年次大会は初めての1日開催となりましたが、大変充実したプログラムとなりました。その成果を踏まえ、本号では充実した内容の報告を掲載することができました。ご報告をお寄せくださいました各報告者の皆様に、心より感謝申し上げます。また、例年通り、各会からもご報告をお寄せいただきましたことに、厚く御礼申し上げます。

本号の編集は、新たにNL委員を拝命いたしました野口を中心に行いました。不行き届きの点もあるかと存じますが、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

(NL委員会：坂井二郎・内藤伊都子・野口生也)